

平成18年(昭和81年)11月14日(火)

東海の古代

第 77号 編集・発行 古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川1-729

メール frttokai@zm.commuja.jp

電話/FAX(カラー可) 052(936)5012

郵便振替 00870-5-30752

先日入院中の父を見舞ったとき、同室の人の名前が「玉」と表記されているのに気づきました。

何と読むのか気になって、看護師さんに聞くと「たま」だそうです。男にしては不思議な名だと思ったのですが、母によると昔はよくあったそうです。わざと女に間違えられやすい名をつけて、徴兵を逃れようとしたとのこと。

何としても生き延びてほしいと名づけるのも親心、「武彦」とか勇ましい元気な名をつけるのも親心でしょう。憶良を引くまでもなく親にとってわが子は珠玉に優るものであります。

今もなお戦争の影を引きずる人がここにもいます。古代史においても、声なき声にも耳を傾ける努力を続けたいものです。

新年、大阪で 古田武彦講演会

主催：古田史学の会（全国）

日程：1月20日(土)午後1時半～4時半

会場：大阪市立中央青年センター

(大阪府中央区法円坂)

JR森之宮 西へ徒歩十分

電話06・6943・5021

参加費：千円

最新の古田説に触れることができます。ぜひ一緒に参加しましょう。

「偽」の秘す「真」

古事記・日本書紀は読み返すたび、奇妙な記事を発見できて興味がつきません。次の史料はどう考えますか。

辛未(二十日)に、偽兵衛河内國の澁川郡の人柏原

廣山を土左國に流す。追廣參を以て、偽兵衛廣山を捉えたる兵衛生部連虎に授く。(持統紀三年秋七月)

「偽兵衛」との表記がまず不思議でした。ニセの兵隊さんが捕まって土佐国に流罪になる？官職詐称程度でずいぶん重罪です。背後に何があるのでしょうか。

天武四年に麻績王が因幡に流され、天武五年に屋垣王が土左に流されます。天武六年四月に「杵田史名倉、乘輿を指斥りまつれりといふに坐りて、伊豆嶋に流す」とあります。

大乱罪や不敬罪に当たる場合、つまり王朝存立の大義名分を犯した場合の刑に当るようです。

岩波古典文学大系本の語注では「兵衛は養老軍防令に『凡兵衛者、国司簡下郡司子弟強幹使弓馬者上、郡別一人貢』とあり、古くは国造の子弟から選抜した」としています。

また壬申の乱で活躍した大分君稚見が天武八年三月に死んだ時の肩書が、兵衛です。岩波本の語注に「天皇親衛軍の一。大化前代の舎人の系譜をひくもので、大宝・養老令制では内六位以下八位以上の嫡子、および郡司の子弟から選抜され、左右兵衛府に各四百人が所属し、親衛軍の中核をなした。その制度は天武朝に整備されたものと思われる」としています。

天武が死んだ時の葬儀で「次に直大參當麻真人國見、左右兵衛の事を誅る」（朱鳥元年）とあります。この時点である程度兵衛の制度が出来上がっていたようです。

要するに兵衛とは親衛隊、近衛兵のようなもので、構成員は庶民でなく各地の豪族の子弟から選抜され、天子に直接忠誠を尽くす存在でしょう。

そして持統を天子と認めなかった近衛兵が「偽兵衛」と呼ばれたのではないか。当時、持統以外に「天子」がいた。なお九州王朝への忠誠を失わぬ者がいた。その反映としてこの事件が起きた。そうは考えられないでしょうか。

古田史学の会事務局長の古賀達也さんが以前触れられたことがあります。

是の日に詔して曰はく、「朕、王卿に問ふに、無

端事を以てす。仍りて對へて言すに實を得ば、必ず賜ふこと有らむ」とのたまふ（天武紀朱鳥元年春正月）

この結果、高市皇子と伊勢王が多く賞を得ました。「無端事（あるなしこと）」とは奇妙な言葉ですが、岩波本の註では『未詳。積紀の兼方の按には「今世何何歟」とあって、なぞなぞのこととし、集解は考課令という方略のことで、多聞博覧を試みるために種々の問を發することという。無端は端緒の無い意。とりとめもないこと、何ということもない意。俗語的用法か。考課令集解古記に「多聞博覧之士、知無端、故試以ニ无端大事一也」などとある』としていますが、はっきりしません。

しかし古賀さんは「無端事」について、近畿王朝が實(正)、九州王朝が偽であることを問い質すことだと説明されました。天武が、九州王朝を見捨てて自分への忠誠を表明することを「無端事」と称して周囲に迫ったものと思われます。例えば「ニニギの直系子孫は今どこにいるのか」等と問いかけたのではないのでしょうか。

古事記序文に天武の言で「朕聞く、諸家の賣る帝紀及び本辞、既に正實に違ひ、多く虚偽を加ふと。今の時に當りて、其の失を改めずば、未だ幾年をも経ずしてその旨滅びなむとす」とあります。ここで諸家とは各地の豪族、正實とは近畿天皇家が正統、虚偽とは九州王朝が正統と主張することを意味するのでしょうか。

持統三年は西暦689年です。古田先生のいうONライン(西暦701年)まで後12年、まだ持統のお膝元(河内)ですら、こんな騒動が起きていたのです。

12月例会に参加を

日程：12月10日(日)午後1時～4時半

場所：名古屋市公会堂第3集会室(2階)

名古屋市昭和区鶴舞1丁目1-3

地下鉄鶴舞線「鶴舞」下車4番出口徒歩2分

JR中央本線「鶴舞」下車公園出口徒歩2分

参加費：500円(維持会員は無料)

今後の予定

1月例会：1月14日(日) 市政資料館

2月例会：2月11日(日) 会場未定

例会は原則的に毎月第2日曜日です。会場によって開始・終了の時間帯が異なりますので注意してください。

古田先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡は不要です。遅刻早退もかまいません。研究報告・意見発表は大歓迎です。

なお12月例会の後は忘年会の予定です。

書籍紹介

古田武彦と「百問百答」

古田武彦と古代史を研究する会(略称:東京古田会)から注目すべき冊子が出されました。東京古田会の会員から集められた131の質問に古田先生が克明に答えられた回答集です。

新しい重要な見解も数多く発表されています。古田ファン必読です。東京古田会に振込めば、宅配便で送られます。

領価：1000円(送料込)

郵便振替口座：

00110-1-93080

参問倭地か、倭・地か、

又有裸国黒齒國復在其東南船行一年可至参問倭地絶在海中洲島之上或絶或連周旋可五千余里

久保田穰著「邪馬台国はどこにあったか」(プレジデント社)に面白いことが書いてありました。上記の魏志倭人伝の一節にある「参問倭地」の倭と地は区切って読むべきだということです。

つまり「倭人に尋ねたところ、その地は」と読むべきで「倭地」でなく「裸国黒齒国」が話題になっていて、その国々は島々があるいは孤立しあるいは連なって「周旋五千余里」になっている、と解すべきだとしています。「地は」という言い方は『晋書』倭人伝に「地多山林無良田」、『旧唐書』倭国伝にも「地多女少男」があるとします。一理あると思いませんか。